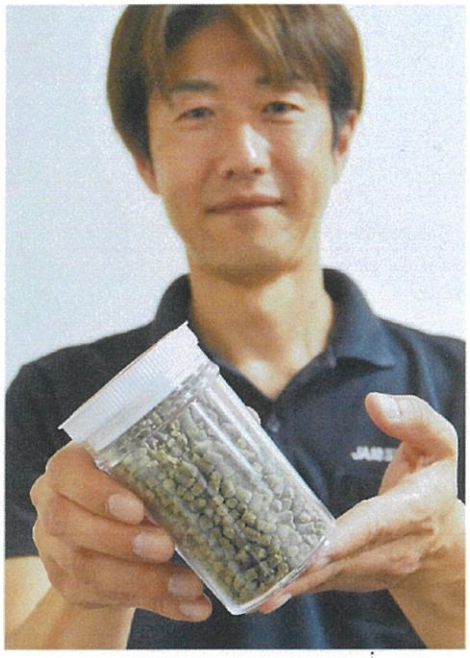
2023年07月09日　（日）　日本農業新聞　朝刊　総合１面１２版遅

堆肥入り肥料 小麦で実証

ＪＡ埼玉ひびきの 地域の鶏ふん使用

二毛作の土づくりに



原料の45％を堆肥が占める肥料（埼玉県本庄市で）

埼玉県のＪＡ埼玉ひびきのは、地域の大規模養鶏業者から発生する鶏ふんを使った混合堆肥複合肥料の実証を進めている。米麦二毛作が盛んな地域での土づくりや、国内の肥料資源の活用を目指す。秋に播種（はしゅ）する来年産の小麦では40㌶で試験する予定だ。

肥料価格の高騰を受け、２０２２年度から検討を始めた。堆肥と化学肥料を混ぜた混合堆肥複合肥料の活用で、米麦二毛作が盛んなため圃場（ほじょう）が空く期間が短く、堆肥や緑肥を使った土づくりが難しい課題の解決を図る。

管内の大規模な養鶏業者や、工場がある肥料メーカーの朝日アグリアと連携。実証する混合堆肥複合肥料は鶏ふん堆肥が原料の45％を占め、肥料成分は窒素12％、リン酸5％、カリ5％を保証する。

今年産で3件の農家が使い、生育などが慣行の化学肥料と大差はないことを確かめた。

来年産ではＪＡ管内のひびきの農産の構成員の農家らが計40㌶で実証する。追肥分を含めて10㌃当たり１００㌔㌘施肥する。農水省の国内肥料資源利用拡大対策事業を活用する。

水稲などでも実証を進めている。ただ、６月から供給する秋肥の価格下落などから肥料費の削減効果は限定的となる見込み。ＪＡは「土づくり効果など価格以外のメリットを農家に伝えつつ、地域での資源循環の一つのモデルにしていきたい」（営農支援課）と話す。

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。